

目次

はしがき……………松尾 聰……………一

研究篇

平安時代における歌物語の精神的位相……………高橋 正 治……………七

——認識過程としての「あはれ」論の内——

歌物語要素とその投影……………西村 亨……………一〇

源氏物語における伊勢物語の本旨の問題……………福井 貞 助……………一六

『伊勢物語』における源順の関係章段……………雨 海 博 洋……………二一

物語女性の呼称表現——紫上呼称の選定原理——……………神 尾 暢 子……………二六

新古今集と源氏物語——定家の本歌取と源氏物語の引歌——……………藤 平 春 男……………三七

「六条わたり」の女の特異性…………… 檜原茂子…三九

『河海抄抄出』小引(付)細川切のこと…………… 高田信敬…三九

資料篇

河海抄抄出・花鳥余情抄出(宗祇)……………

翻刻池田利夫・高田信敬…三九

河海抄抄出…………… 三九

花鳥余情抄出…………… 三九

研究篇

「生成の論理——日本の古代中世文学史における精神史的展望——」（清泉女子大学人文科学研究所紀要 創刊号）で、人間の生成過程においては、精神的に「あはれ」の心情が根底となり、それが深まり、その心情こそ認識を深める根本条件になっていることを述べた。「もののおはれ」論のような美的理念としての研究に偏向していた「あはれ」論を、人間の生成過程の動力として考えたかったのである。

本稿では歌物語が、その「あはれ」の心情の働きの上で、どのような位相にあるかを見て行きたい。しかし、平安時代の文献を通して、現代の「われ」がその時代を精神的に遠望するとき、その精神的映像を見晴らすことができても、それはあくまでも映像であり、結果に過ぎない。そのような理解は外面的観念的静止的なものであり、次の段階への生成発展の内面的実感的動的必然を捉えるためには不十分である。精神的生成は肉体をも媒介とするものであるので、平安時代の精神位相を現代の「われ」にできるだけ復元するためには、それぞれの間の人間の位相差を明確に捉える方法を改めて考えなければならぬ。したがって、歌物語のことを論ずる前に平安時代の感性の地盤を確かめるといふ迂遠なことから始めて行こうと思う。

『平家物語』巻第九「知章最期」では、平知盛は生田森の戦で大将として戦ったが、負けいくさで、その軍勢はみな落ち失せ、息子の武藏守知章、侍である監物太郎頼方と主従三騎になってしまった。味方の陣は海上であったので、助け船に乗ろうとして汀の方へ行こうとすると、敵が十騎ばかり追っかけて来た。その中の大将と思われる者が知盛に襲いかかって来たので、知章は中へ割って入り、馬をおしならべてむずと組んでどうと落ち、取っておさえて首を掻き切ったが、